

諸行事御詠歌集



愛知西教区連合会



ご挨拶

平素は無相教会の活動にご協力賜り誠にありがとうございます。

さてこの度、皆様に花園流御詠歌に親しんでいただきたいと思い、CDを制作いたしました。お寺での開山忌お盆お彼岸等の行事の際にこのCDを流していただけると幸いです。

録音は犬山宗栄寺様の本堂をお借りいたしまして、名誉詠鑑羽澄先生、師範待遇日坂先生、準師範待遇青井先生をはじめとして、講師の資格をお持ちの寺庭さんにご協力を頂きました。当日は先生方のお声もすばらしく、また宗栄寺様の本堂の環境もあり見事な出来栄となりました。皆様是非お聞きください。

無相教会愛知西連合会





《御詠歌とは》

日本の心 禅の心 妙なる心 こころ 情に響く しらべ 音調

御詠歌とは「讚さんぶっか仏歌」とも言われ、鈴れいと鉦しょうの美しい響きとともに仏さまとその教えを讃えてお唱えするものです。お経の内容をわかりやすく表現したもので、真心を込めてお唱えすれば、仏さまやご先祖さまに対するご供養にもなります。また、仏教や禅の深く尊い教えが、誰にもわかる親しみやすい言葉で表されていますので、お唱えするうちに仏さまの教えに自然に親しむことができます。

「仏教や禅は難しくわからない」と思っている方でも、御詠歌に親しむことによって、様々な仏の教えを知ることができるでしょう。

〈妙心寺ホームページより一部抜粋〉





[曲目]

- | | |
|-------------|-----------|
| 1. 無相教会御和讃 | 一番・二番 |
| 2. 宗門安心章御和讃 | 一番・二番・御詠歌 |
| 3. 追善御和讃 | 一番・二番・御詠歌 |
| 4. 盆施餓鬼御和讃 | 一番・五番・御詠歌 |
| 5. 彼岸会御和讃 | 一番・二番・御詠歌 |

(合計二十五分)





～ 1. 無相教会御和讃 ～

作詞：古川大航 作曲：岩田貞雲

一. ^{ひごとつき}日毎月ごと ^{すす ゆ}進み行く ^{むそらきょうかい}無相教会 ^{いやさか}弥栄え
^{ただ}かたく正しく ^{ひろめんと}ひろめんと ^{えいかわさん}詠歌和讃の ^{かずかず}数々を

二. ^{ひと}一つにまとめ ^{わかつなる}わかつなる ^{こころ}心をきよく ^み身をおさめ
^{とな まつ}唱え奉れる ^{まごころは}まごころは ^{しょぶつ じょうど}諸仏の浄土に ^{つうてつ}通徹し





※無相教会の「無相」とは、妙心寺の開山さま、関山慧玄禅師の諡、おくりな無相大師からきています。

手相、人相というように相とは姿形ですが、仏は無相で相がありません。男でも女でもない、大人でも子どもでもない、美しくも醜くもない、姿形が一つに決まっていない、つまり仏とは何にでもなれる無相（本来）の姿です。

日々湧き上がる意識や感情、喜怒哀楽を一つの形に留めることなく、引きずることのない仏の心は、いつも新鮮で真っ新です。何を見ても新しい、何に触れても新しい、当たり前の日常にも驚きと感動を生まざりおれないのが仏です。

この無相教会御和讃は、「日々精進」を願い、「一心唱和」を説き、「詠歌成道」を示されており、自分の都合に留まらない無相の心に立ち返る、いわば生き仏となって、お互いが心豊かに生きることを説いています。





～ 2. 宗門安心章御和讃・御詠歌 ～

作詞：土方紹篤 作曲：岩田穆堂

一、 ひとと うまれて のり あ 縁は ゆかし さんぼう
あ お 仰ぎ まつり て 朝 夕 に 南 無 釈 迦 牟 尼 仏 と 唱 う べ し

二、 じしん ほとけ 自 心 仏 ぞ め ぎ め よ と ぶつ そ 仏 祖 の さ と し あ り が た し
いちざ 一 坐 か か さ ず じしん 自 信 も て まよ やみ やぶ 迷 い の 闇 を 破 る べ し

< 御詠歌 >

ほとけ おしえ ちと のり
み 仏 の 教 の 本 ぞ この 法 は
ひと ひと とうと とく
人 と し 人 の 尊 さ を 説 く





※『宗門安心章』とは、臨済宗妙心寺派の教えを、僧侶、在家問わず広く伝えるために昭和40年に山田無文老師、倉内松堂老師、伊藤古鑑師によって編纂されたものです。

内容は、第一章「信心帰依」、第二章「自覚安心」、第三章「行事仏道」の三つに分けられ、無相大師、花園法皇、臨済禅師の教えと、仏道実践を端的に表したものです。

一般的な^{あんしん}安心とは「心配・不安がない」ということですが、^{あんじん}禅の安心とは「心配・不安があってもそれを苦にしない」ということです。思い通りにならないことを思い通りにしようとするのではなく、思い通りにならないことをそのまま誤魔化さず向き合うことが、^{あんじん}安心へと繋がります。





～ 3. 追善御和讃・御詠歌 ～

作詞：大平瑞山 作曲：東海宗益

一. あわれ^{むじょう}無常の世^よにあれば 生命^{いのち}とどむるすべもなし
せめてよみじに幸^{さち}あれと 願^{ねが}いてここにつどうなり

二. ゆらぐ^ほ灯かげにはらからが ありし日^ひのこと語り^{かた}あい
千草^{ちぐさ}八千草^{やちぐさはな}花かげに 面影^{おもかげ}しのぶひとときよ

< 御詠歌 >

やす^{やす}安かれと おろが^{おろが} ころろ^{ころろ} 拝む心に かよいくる

みたまを^て照らせ 法^{のり}のともしび





※追善とは、父母六親はいうに及ばず、先亡の精霊に対して供養仏事を行うことです。「追」は残された者が、亡き方を追慕して尽くすこと。「善」は亡き方の霊前に供物をそなえたり、縁者を招いて宴を開いたり、恵まれない者に施すことです。様々な布施行がありますが、中でも一番の供養は残された私たちが、仏縁を結び育むことです。

妙心寺の開山さまは「慧玄が這裏に生死なし」と仰いましたが、「生死なし」とは生死を超えることです。この生死、善悪、損得の相對を超えた仏道にいそしむことが、ご先祖への無上の追善となるのです。御和讃に「生死を超えむ誓いこそ、こよなき今日の^{たむ}手向けなれ」とお示し頂いています。

仏の教えに触れ、布施行に身を投じることが、亡き方の追善となり、私たちにとっても生きる上で大きな力となります。





～ 4. 盆施餓鬼御和讃・御詠歌（目連尊者御和讃）～

作詞：古歌 作曲：岩田貞雲

一 ほろほろと ^な 鳴く ^{やまどり} 山鳥 ^{こえき} の声聞けば

一. ^{ただみ} 只見るものは ^の 野も ^{やま} 山も ^{むみょう} 無明 ^{ぐち} の愚痴 ^{やみふか} の闇深く
^{おも} 思い ^{てかな} 出悲し ^そ 其 ^{むかし} の昔 ^{しやば} 娑婆 ^{えにし} の縁 ^{あさ} は浅くして

五. ^{てんめいかいご} 転迷開悟 ^{ゆめさ} の夢覚めて ^{そらと} 空飛ぶ ^{とり} 鳥もなつかしく

一 ^{ちち} 父か ^{おも} と ^{はは} 思う ^{おも} 母か ^{おも} と ^{おも} 思う





※「ほろほろと…」の歌は奈良時代の行基菩薩の作と言われ、それを頭尾に分けています。山鳥の鳴き声を父母に重ね合わせ慈愛をしのぶ姿は、現代の私たちにも通じます。

お釈迦さまの十大弟子の一人、目連尊者ぼんねんの母親は、我が子可愛さのあまり、他人には与えず、出し惜しみする慳貪けんこんの心を起こして餓鬼道に堕ちてしまいます。全身骨と皮になってやせ衰え、哀れな姿になった母を救うため、目連尊者はお釈迦さまの言う通り、修行が一段落する旧暦七月十五日に修行僧に食事を供養して、皆の力を借りて祈ることで母を餓鬼道から救い出すことができたといひます。

現世においても、今まさに種々の災難に逢い、目連尊者の母のように、苦しんでいるものを救うために、盆棚に食物を供養する風習となりました。母は自分のお腹を痛めて、子を産み育ててくれます。「我が子のためなら」、という盲愛に包まれてこそ、子は育つもの。ここで大切なのは、我が子可愛さゆえに慳貪の心を起こしていると気付くことです。仏の願いに耳を澄まし、今の自分に出来ることを、家族のみならず、周りに施していくことがお盆の心といえましょう。





～ 5. 彼岸会御和讃・御詠歌 ～

作詞：大平瑞山 作曲：東海宗益

一. ^{あつ}暑^{さむ}さ^す寒さも過ぎゆけば ^{かげ}影も^{ひかり}光もなごむなり
つらき^う浮き^よ世も^た耐えゆかば ^{よろこ}び^う生くる^ひ日は^{ちか}近し

二. ^{みおや}祖先^{しの}のことも思びつつ ^{かた}みに^{のり}法の^{みち}道したい
^{ろくど}六度の^{ふね}船に^{さお}棹さして ^さとりの^{きし}岸に^{いた}到るべし

< 御詠歌 >

^ゆいざ^{ひが}行かん ^ん行きて彼岸の ^{はな}花を^み見ん
^{まよ}生死^{うみ}の海は ^{なみ}波あらくとも





※「迷い」が生じる世界を「此岸」と呼び、その反対に心安らかな世界を「彼岸」といいます。迷いの此岸から、安らぎの「彼岸」に渡る努力をする仏道実践週間。それが本来のお彼岸です。

彼岸に到るため、^{ふせ}布施・^{じかい}持戒・^{にんにく}忍辱・^{しょうじん}精進・^{ぜんじょう}禪定・^{ちえ}智慧の六つの仏道実践の徳目が説かれますが、全てに共通するのは、自分をいったん脇に置いておく、ということです。自分中心の考えは常に周りとの比較から始まるからです。

亡き方と同じ立ち位置に立ち、他人と自分を比べない、過去や未来の自分と今の自分とを比べない、今生かされているこの場所が、そのまま有り難い場所だと目覚めるなら、それがそのまま「彼岸に渡る」ということです。彼岸は何も特別な所にあるのではありません。苦しみも悲しみも混然一体となった人生の事実を、しっかりと受け入れた「今、ここ」が、自分の目指す場所であり、それを彼岸というのです。





《花園流御詠歌の歴史》

大正時代初期、従来の巡礼歌を脱皮し、弘法大師帰依を淨らかに詠いあげ、民衆の心の琴線をゆさぶった新しい詠歌が誕生します。これが大和流御詠歌といえます。

花園流は、岩田貞雲流祖が大和流に伝わる、かたい男性的な手を動かして唱える所作に関心を持ち、これをやわらかく、まろやかな所作に発展考案されました。

生涯手を以って指導し、作曲され、花園流といえば所作のある流派と全国的に認められ一大特色でした。本山龍泉菴・釈仏海老師の新作、即ち三和讃、三詠歌に所作及び節付をして、昭和十一年、無相教会の前身となる大慈教会が結成されることになりました。

その後、昭和二十五年に花園流無相教会と改め、現在約一万一千人の会員を擁するに至っています。





《皆様へのお願い》

御詠歌を習ってみたい方、見学してみたいという方は、菩提寺の和尚さま、または愛知西教区詠道部までご連絡下さい。

ご詠歌は歌謡曲とは違い、仏祖を讃え、教えを学ぶものです。しみじみと聴けば聴くほどしみりとして、人の世の真実の姿が目の前に浮かんで来て、何かしらジーンと心に伝わってくるものがあります。

仏の教えは、私たち自らも救われ、他の人も救われる「自利、利他」の教えであり菩薩行そのものです。唱える姿がそのまま菩薩であり、一心にお唱えする心は、仏の浄土へと通じていきます。

是非一度体験してみたいはいかがでしょうか。詠道部一同、心よりお待ちしております。





愛知西教区連合会長 圓光寺 山田英隆

名誉詠鑑 福昌寺閑栖 羽澄直樹

師範待遇 宗栄寺 日坂宜祥

準師範待遇 青井元子 (瑞雲寺)

講師 林義子 (興禪寺)

小坂愛子 (徳林寺)

寺沢明美 (覚王寺)

野呂悦子 (文永寺)

木下道子 (乾徳寺)

詠道部 凌雲寺 岡田至道

乾徳寺副住 木下紹胤

事務局 祥雲寺 石塚大明

福昌寺 羽澄一乘

会計 徳林寺 小坂雅俊

令和二年六月十九日 収録





花園流御詠歌

